

フィールドワークをするということ

萩原卓也

学部時代アメリカで人類学を学び始めた頃、私は人類学が持つ可能性について知りたくて、先生にこう聞いたことがある。"What can I do with Anthropology?" 答えに困る質問をよく自分でもしたものだと思うが、彼は少し間を置いてこう答えた。"What can you do without Anthropology?" 私はこの時、その意味がなんとなくしか分からなかった。

「なんで女子プロレスなんですか？」

初めて会う人に私の研究を話すと、必ずこう聞き返される。研究上の意義をあれやこれやと返答するにはだいぶ慣れたが、はて、根本的にはなぜだったか。



「女子プロレスが面白いんじゃないの？」

今まで見たことも、正直興味もなかった女子プロレスに目を向けるきっかけとなったのは、指導教員の勧めだった。彼女たちとの最初の出会いは、地方巡業で訪れていた小さな町の体育館だった（上写真）。肉体ひとつで必死に闘う彼女たちの姿は輝いて、観客を大いに盛りあげていた。

試合後、片付けを手伝った。そこには、リング上とはまた違う「ごく普通」の顔の彼女たちがいた。彼女たちの「生」に迫ってみたいという気持ちが生じると同時に、自分は彼女たちのように「強く」生きられるのだろうかという憧れも芽生えた。彼女たちの「生」に魅了されて、私のフィールドワークが始まったのだった。

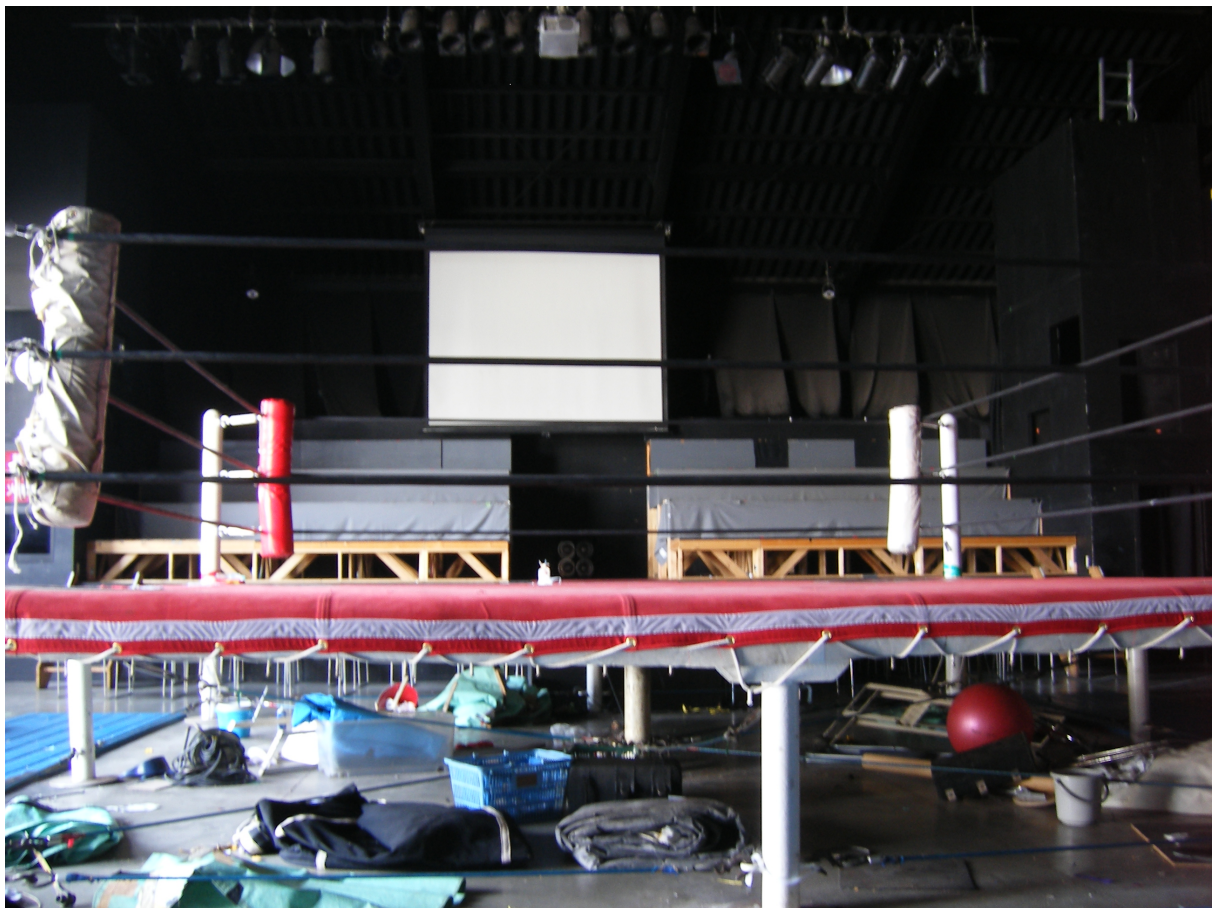


それから興行（上写真）に通い、練習を見学させてもらう日々が続いた。そんなある日、練習場（下写真）の片隅でノートをはたすら取る私に、「実際にやってみないと、何も分からないですよ」とあるレスラーが話しかけてきた。それから私は、リングにあがってレスラーたちの練習に参加させてもらうようになった。その日を境に私の身



体には、受け身の反復によりあざや擦り傷が刻まれていき、全身には激しい筋肉痛がこびりついていった。練習相手が自分の腹部に飛び乗ることで腹筋を鍛える筋トレは特に厳しく、そんな練習を続けるなかで嘔吐してしまうことさえあった。

私は、レスラーと同じような傷が身体に刻まれていくことを通して、また共に苦しい練習を積むことを通して、彼女たちが経験している肉体的な痛みも、精神的な苦しさも、少しだけ共有できたような気がした。そこから、怪我や痛み、苦しい経験を身体的に共有していくことを通して、プロレスの試合を成立させる信頼関係を受動的・無意識的に築き上げていくレスラーの姿がみえてきた。では、果たして私自身はここから何を学んだのか？



フィールドワークは、様々な形態を取る。しかし、どんなフィールドワークでも、フ

フィールドに持ち込んだ問題意識や疑問がパッと解決されるわけではなく、むしろ疑問の方が増える。痛みという一般的には悪者とされる現象が、人々をつないでいくのはなぜだろうか？私が慣れ親しんできた、勝敗があるからこそ美しいというスポーツの在り方は本当に「正しい」のか？これは、自分の先入観や認識を問い、自分の世界の限界を改めていくプロセスでもあった。フィールドワークをする機会がなかったら、誰かの「生」について深く関与し、それを通じて自分の「生」について見つめ直すことができただろうか。"What can you do without Anthropology?" 女子プロレスラーとのフィールドワークを経験した今なら、彼の言わんとしたことが分かる気がするのである。